

—入っていいですか？ ボス。

—入って、スシ、どうぞ。

—ご存知ですか？ヘスス オネストが亡くなったのを。新聞 記者の。

—何だって？ヘススがどうして死んだの？君どうして知ったの？

—幾紙もの新聞記事に載っているのです。全ての新聞がガス自殺だと言っていました。

貴方、ボス、彼をよくご存知でしょう。そうでしょう？

—知っているよ。良く知っているよ。同じ学校で学んだし、その後の兵役も一緒だった。

ありえない、彼が死んだなんて有りえない！

ペペ・レイは思い遣りのある男だ。そして彼の友達に対し高潔でとても友好的だ。

しかも、もっと厳格な人間で有るように見えることが好きなことは確かだと知り、スシは驚いた。この事件に出会い彼は涙を流さなかった。

—時々我々は一緒に夕食に出かけグラスを傾けた、そして昔のことを思いだし話合ったものだ。

ペペはとても低い声で話を続けた。

—私のサントの日、彼の家を訪ね夕食をご馳走になった、とても元気で沢山のプロジェクトを・・・その上色々な事柄が、うまく行っており沢山の仕事を抱えた、有名で人に好かれた新聞記者だった。感じの良い奥さんとは上手く行っており、素晴らしい息子達もいる・・・。

—最近のこの何か月かに何か重大な問題があったのか・・・。

—いや無い、スシ、無いよ。ヘススは自殺をするような種類の人間ではない。理由が分からない。真実。

—何か私に必要なことが有りますか、ボス。